The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	人類にとって戦争は必要か?
Author(s)	紀平, 知樹
Citation	臨床哲学のメチエ. 2007, 16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10634
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

11 月 26 日

人類にとって戦争は必要か？

紀平知樹

私が担当した授業の問いは「人類にとって戦争は必要か？」という問いであった。後期の授業では、前期のうちにアンケートなどで書いてもらった学生のみなさん自身が考えたい問いを三つのジャンルに分けて、それぞれに分かれてそのジャンルから一つの問いを作るという作業をしてもらった。私は、この「人類にとって戦争は必要か？」という問いを作ったグループに入って (オブザーバーとして) いたので、この回のファシリテーターを担当することになったわけだが、問いを作る段階から、かなり難航をしていた。短い時間の中でもいろいろな紆余曲折があり、最終的には、この問いをグループの問いとして発表したわけだが、その時点でも、今ひとつ、この問いによって何を問うのかということははっきりできていなかったように思う。そしてこの問いを立ててさらに三週間の時間が経って、クラス全員でこの問いを議論する日がやってきた。

私自身、この問いでの対話のファシリテーターをすることになってから、どのように議論をすすめるべきか、何を問うべきかなどいろいろ考えてみたが、なかなかこれといった妙案が出るわけもなく、無情にも時間だけが過ぎていった。その中で考えたことは (ある種の逃げでもあるような気がするが)、75 分という短い時間の中で、この問いに対する答えを出すということを目的とす

るのではなく、むしろうまくいかない議論を通して、何がよくなかったのかを反面教師的に気づいてもらえばいいのではないかと考えた。また、このテーマに関して、誰も実際の戦争を経験したことがないということもあり、加藤尚武の『戦争倫理学』の数頁をコピーして当日の授業に臨むことにした。

当日の授業では、学生のみなさんには、議論の手続きや答えを出すために必要なことは何かを考えてもらうということはあえていわずに、この問いについての議論を行ってもらった。最初のうちは、「戦争をどう定義するか」ということや、「戦争は目的か手段か」などといったことを考えたいという発言があり、しばらくそのことについての意見を話してもらっていたが、少し行き詰まりかけたところで、当日配布した『戦争倫理学』のコピー (19 － 21 頁、37 － 38 頁) を読んでもらうことにした。

これが一つの転換点だったかもしれない。

この資料を読んだあとの学生の発言は、ある意味では戦争を定義するという方向での発言だったように思われるが、同時にまた、きわめて抽象的 (理念的という意味ではなく、具体性を欠く) な意見が多かったように思われる。抽象性というのは、ある種の普遍性をもつがゆえに多義的になりやすいし、それだけにその語をどのような意味で使っているかを明確に定義しなければ、議論が混乱してしまう。そのような議論に介入して、言葉の意味を定義させたりするのもファシリテーターの役割であるが、今回はあまり介入せずに議論を続けてもらうことになってしまった。

今年度の最後の振り返りの授業でも、学生のほうから「もう少し議論に介入してほしい」という意見や、「問題設定に問題がある」というような意見が出されていた。これはその通りかと思う一方で、では、議論のどこに介入すればいいのか、どのような問題設定をすれば議論が深まっていくのかという点を参加した学生の人たちみんなで考えてほしいという気もする。あるいは、今回の対話は、うまくいかなさを通じてそのようなことに気づいてもらえればとも考えていたので、それはそれでよかったのではないだろうか。もちろんうまくいかない対話の原因を究明する時間がもっとあればなおよかったのではあるが・・・・。

ともあれ、このもどかしい議論を 70 分という時間を我慢して、いろいろ考えながら対話に参加してくれたみなさんにはお礼を言いたいと思います。